

## ワルシャワ・サミットと、NATOの向こう見ずな強がり

【訳者注】専門の戦略家のこの文章からは、米露の間に現実の大戦争が起こる可能性は小さいと思われる。しかしこれは、あくまでも当事者が理性をもっていれば、という条件付きである。大部隊によって、敵でもない敵を包囲するということが、すでに常軌を逸している。論者は、これはヨーロッパの民衆の間に、反ロシア感情を掻き立てるためだが、それは逆効果だと言っている。かりにこれが、子供のような無思慮で馬鹿げた行動だとしても、高をくくって侮ることができないのが、米 - NATO 行動である。

このような時期に、このような事実を無視して、ことさら日米韓の結束を訴えるような運動は、明らかに間違っている。それは戦争のための結束と世界からは解釈されるだろう。

Alexander Mercouris

Global Research, July 10, 2016



*NATO* 軍のポーランドやバルト諸国への展開は、危険な宣伝運動であって、それはすでにバックファイアを起こしている。

4大隊を、ロテーションの形で、ポーランドとバルト海に配備するという *NATO* の計画は、最悪の決定である。しかし我々は冷静でいる必要がある。これは、まもなく戦争が始まることを意味するものではない。

*NATO* が、ポーランドとバルト諸国に配備している4個大隊は、ロシアを脅かすことはできない。ドイツの戦車が、第二次大戦以後、初めてサンクト・ペテルブルグ近くにまで進出したという、誇大妄想的な報道がいくつかある。私は最近ペテルブルグに行ってみたが、*NATO* がたった4個大隊——約3000名——でペテルブルグを占領するとか、深刻に脅かす

という話さえ馬鹿げている。かつて、ヒトラーの北方軍は 23 の分隊をもち、さらに 7 分隊からなるフィンランド軍の援助がありながら、ここを占領することができなかった。

## ≡ NATO SUMMIT



ポーランドやバルト海に展開している NATO 軍が、ロシアを深刻に脅かすことはできないだけでなく、もしロシアが攻撃したとしたら、彼らは自衛することさえできないだろう。西側メディアのコメントもそれを認め、NATO 軍は単に、ロシアの攻撃をポーランドやバルト諸国におびき寄せる“わな”として、これを考えているにすぎないと言っている。

いかなるロシアの、そのような攻撃も計画されておらず、その脅威もない。誰一人として真面目に、そのような攻撃の可能性が、少しでもあると言う者はいない。もし NATO のリーダーたちが、そのような攻撃を本当に恐れているなら、実質的に自殺のミッションになるような、そのような、バルト諸国への軍隊の配備を、あえてすることはないだろう。ロシアがその気になれば、NATO 軍は、その地域へ送られる圧倒的に強い軍隊によって、あっという間に踏みこまれるだろう。NATO の将軍たちもそれほど馬鹿ではない。

いかなるロシアの、そのような攻撃も計画されておらず、その脅威もない。誰一人として真面目に、そのような攻撃の可能性が、少しでもあると言う者はいない。もし NATO のリーダーたちが、そのような攻撃を本当に恐れているなら、実質的に自殺のミッションになるような、そのような、バルト諸国への軍隊の配備を、あえてすることはないだろう。ロシアがその気になれば、NATO 軍は、その地域へ送られる圧倒的に強い軍隊によって、あっという間に踏みこまれるだろう。NATO の将軍たちもそれほど馬鹿ではない。

このような軍の配備については、ロシアが攻撃してきた場合、NATO が、バルト諸国を防衛するための、集団的自衛権を行使しているのだと言われるかもしれないが、NATO もロシアも本当はそんなものを信じていない。では NATO はなぜ、ポーランドやバルト諸国に軍隊を送るのだろうか？ ひょっとして、それは時間をかけて、その地域にもっと多くの軍隊を増強し、ロシアを最終的に本当に脅かす、より大きな計画の一部なのだろうか？

それはない！ 実を言えば——真面目な軍事アナリストなら誰でも知っているように—— NATO の核心である米軍は、拡大しすぎた深刻な状態にあり、この地域にこれ以上増強するほどの予備軍をもたないのである。一方、アメリカの NATO 同盟軍の能力と肩入れは、今ひどく低下し、どんな相手でも深刻に脅かすほどの力が、あるかどうか疑わしい。2011 年のリビアでの乱暴の時のように、英軍と仏軍が協力しても、アメリカの援助を求めなければ、カダフィの軍隊を負かすことができなかったのであれば、彼らは、ロシアを相手にする立場にはなく、今日、第二次大戦の時のような力の片鱗をさえもたないドイツに、そんな能力はない。

NATO が、ポーランドとバルト諸国に軍隊を配備している本当の理由は、今言われているような理由とは全く関係がない。それは NATO が、今再び、ロシアを敵と考えているとい

うことを公然と示す、何らかの方法を求めており、こうした高度に挑発的な、不法な、軍の配備がその方法だと考えているからである。そのようにして彼らは、最近の反ロシア・キャンペーンを支える、ヨーロッパの世論を動員したいと思っているのである。

これは向こう見ずで、かつ愚かなやり方である。それは実質的に、NATO が冷戦の終わりに、ロシアと結んだ合意と約束を、またしても反故にする行為である。それは、かつてのワルシャワ条約国の領土内に、西側の軍隊を配置しないという約束だった。それは、ヨーロッパで最も力のある国家である、ロシアの人民と政府に対して、NATO はお前たちを敵と考えると明言することである。しかもそれを、どんな軍事アナリストであろうと——ロシアにそういう人はいくらでもいる——直ちに見破ることのできる、とんでもない強がりで行っている。

NATO の反ロシア・キャンペーンを支える、ヨーロッパの世論を動員することについて言えば、それは全く逆効果である。戦争とか軍事的展開についての話がもたらすのは、西側の大衆の警戒心を引き起こし、いったい NATO は我々をどこへ連れていくのかと、ますます疑念をもたせることである。イタリアとフランスのリーダーは、自分たちの民衆を安心させるために、自分たちはロシアを敵とは考えないと、公言しなければならなかった。しかし、それならなぜ、彼らは軍隊の派遣に合意するのか、という疑問をますます起こさせている。ドイツでは、今、彼女が連邦議会に明らかにした強硬路線を支持する、メルケルと、それに合意しないことを明らかにした SPD（ドイツ社会民主党）と CSU（キリスト教社会同盟）の連携の間に、明らかな亀裂ができています。

警戒させ、挑発すること、そして強がり、同時にやっつけのけるような政策は、明らかに考え抜かれたものではない。イラク戦争への関与についての「チルコット尋問」(Chilcot Inquiry、トニー・ブレア元英首相に対する戦争犯罪尋問)の報告は、**基本的な正直さの欠如と、あの戦争の背後に、慎重な考慮や計画性がなかったことを、激しく非難している。**核超大国であるロシアに対しても、NATO は全く同じように振舞っている。